

短大生活の中で学習不安を訴える学生の傾向に関する一考察 —相談室業務から見えてきたこと—

長櫓 涼子・佐藤 厚・宮下 加奈子・佐藤 紗菜子・小山 ひとみ

Nagaro Ryoko, Sato Atsushi, Miyashita Kanako,

Sato Sanako, Koyama Hitomi

アブストラクト

本研究では、学生相談室における2011年度から2014年度までの4年間の相談業務記録を基に、短大生活の中で学習不安を訴える学生の実態を明らかにし、その傾向について分析を試みた。その結果、①相談室において学習不安を訴える学生は増加傾向にあること、②それらの学生は学習面で相談相手となる良好な人間関係が構築できていない可能性があること、③そのため学習に関する前期中の不安が解消されないまま後期を迎え、より専門的になった授業に不安を抱いていることが考えられた。

キーワード：相談業務の記録分析、学習不安を訴える学生の傾向、学習不安と対人関係の関連

問題の所在

上田女子短期大学では、学生が利用できる学生相談室を2008年度より開設し、主に開発的・予防的カウンセリングに力を注いだ相談業務を実施しながら現在に至る。開設初年度においては非常勤の臨床心理士1名を置き、一日6時間と開室時間を設定したうえで開室した。予約制で相談業務を行ったところ68件の予約相談があり、その半数以上が友人関係や異性、家族との関係などの対人関係に関するものであった。次年度は年間開室日数を52日間と増やし相談業務を実施したところ、相談件数は94件に増え、相談内容は前年度同様にその半数以上が対人関係に関するものだった（長櫓他, 2014）。このことから、本学の学生相談室を利用する学生の傾向として、対人関係に問題を抱えた者が多く、更に、対人関係のトラブルを作り出す要因は学生自身の成育歴だけではなく、学内での学生生活環境によるものも含まれた。また、少数ではあるが、相談に訪れる学生の中には臨床的疾患を抱える者も見受けられた。このような状況から、学内での学生生活環境の改善と整備が急がれると共に、専門的対応の強化に関する人材確保と

安定した開室日数を実現することが相談室業務の課題となった。

以上の経緯を踏まえ、2011年度には非常勤の学生相談員を2名（臨床心理士1名、養護教諭1名）に増員し、その後も相談室環境を整備しながら、安定した開室日数と環境を確保し、学内の教職員と連携を図りながらの運営方法へと改善を試み、現在に至っている。こうして新たな体制のもと学生相談業務を実施してきたが、2011年度から4年が経過し、相談業務のデータを見たところ、学生の対人関係に関する相談件数が一定の推移を保つ中で、本学の近年の傾向として、学業に関する相談件数も対人関係と同程度の推移を示し始めた。本学で学生相談室を開設して以来、徐々にではあるが、確実に学習に関する不安を訴える相談件数が伸びているのだ。

このような傾向は本学の学生相談室だけに限らず、他の高等教育機関においても報告されている。例えば、高橋・田口（2012）は高等専門学校における学生相談室の利用状況と相談内容の分析結果を論文報告しているが、学業に関する相談が最も多く、その傾向は男女問わず、低学年に多いことが示された。また、池田他（2007）は大学での学業や進路の相談内容に焦点を当て、相談データを用いた質的分析を行っている。これによると、大学生の相談内容は修学に関するものが多く、転部や履修方法に関する不安のほか、単位が取れないことや授業についていくことへの不安を訴える件数が上位に示された。

一方、短期大学においても学力低下は指摘されており、青山学院女子短期大学で教授を務める栗坪（2005）は、読み書き能力の低下が学生の思考力やコミュニケーション能力にまで影響を及ぼすと述べている。栗坪（2005）の意見を裏付けるかのように、橋本・富永（2014）の報告では短大のカウンセリング室を訪れる学生の質が変化していることも指摘される。それは、自分の悩みや意志を単語でしか紡ぎだせず表現方法が乏しくなっている学生の姿や、何を話したいのか聞き手が読み取れないと話がまとまりにくいという現状である。このような学生の姿がある中で、学生相談室で学業に関する不安を訴える学生が増加傾向にあるというのは、当然の結果のようにも思われる。しかしながら、短期大学において学習不安を訴える学生の傾向について記録を基に詳細に分析した論文が無く、現状把握に留まるに過ぎない。本学においても学内では相談件数の把握に留まっており、相談員が個別に学生対応の記録をまとめているものの、学業に不安を抱える学生にどのような傾向があり、どのような支援が必要であるかを情報共有しきれていない。

研究の目的

他の高等教育機関と同様に、本学の学生相談室でも学業に関する相談件数が徐々に増えていることから、相談業務の記録をもとに、短大生活の中で学習不安を訴える学生の実態を明らかにし、その傾向について分析することを目的とする。そして、この研究を今後の学内での支援に繋げるための情報として提供したい。

方法

a. 相談業務について

相談は月曜日から木曜日までの週4回、一日7時間（10：00～18：00）をコマ割りし、予約制により実施。開室日数は、前期および後期と夏季休暇期間を合わせて2011年度と2012年度はそれぞれ119日間の開室であった。更に2013年度は120日間、2014年度は118日間の開室であった。

b. 利用者について

本学の相談室を利用できるのは、在学中の学生である。

c. 期間について

本研究では、2011年度から2014年度までの4年間の相談業務を対象とし、この期間にうけた相談内容について分析を試みる。

d. 分析方法

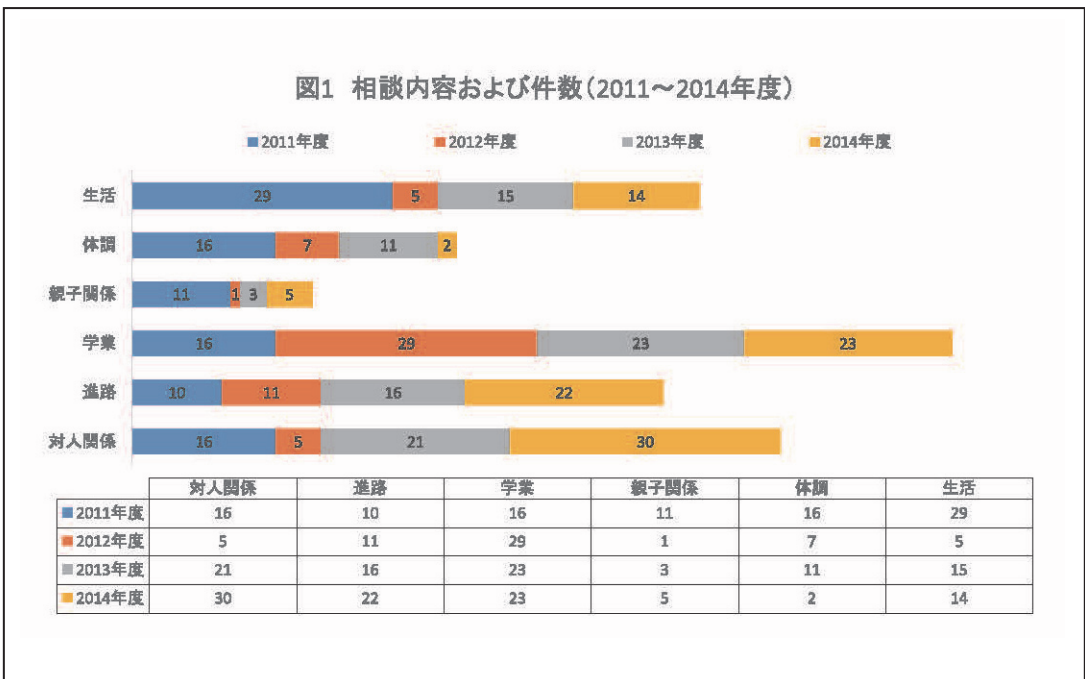
- (1) 2011年度から2014年度までの相談内容のデータから、利用者の現状を分析する。
- (2) 相談記録を基に学業に関する相談内容を取り上げ、学習不安を訴える学生の傾向について分析する。

結果と考察

(1) 利用者の現状について

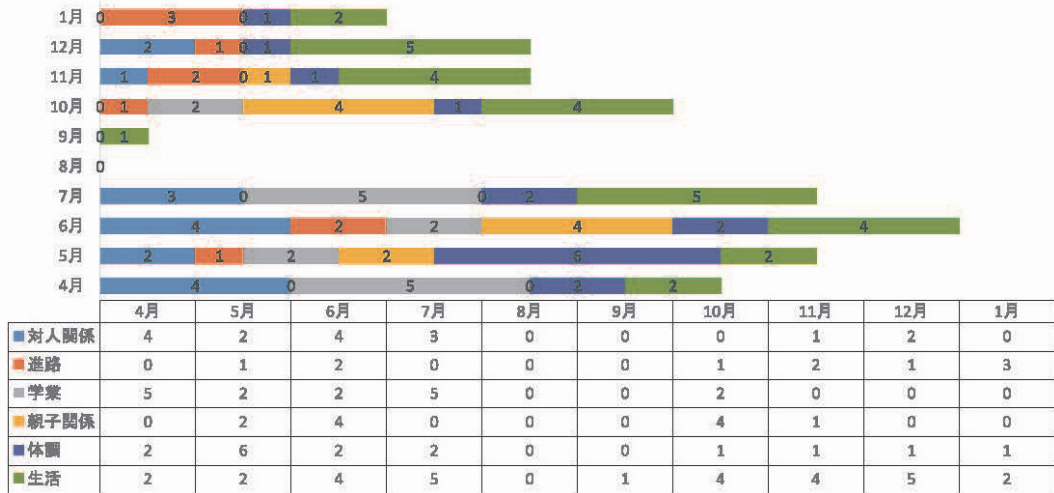
相談室に来室する学生の傾向として、①一時的な相談のみで利用する学生と、②一度相談を始めたことから在学中は継続して利用する学生とに二分された。本論文では前者を「一時利用者」、後者を「継続利用者」とする。

一時利用者の特徴として、何らかの問題や不適応が生じた時点で相談室を来室するが、その



問題や状況が改善され大変な時期を乗り越えると悩みも終結し、相談室を定期利用しなくなる傾向がある。これは本学で多く見られるケースであった。

図2 2011年度 相談内容および件数



一方の継続利用者たちは、当初は対人関係などの様々な理由で相談室を来室する傾向が見られた。そして、相談員との個別面接を繰り返す中で信頼関係を形成し、相談室を安心して過ごせる場として認識するようになっていった。つまり継続利用者たちにとって、相談室は悩みを相談し、問題の自己解決を図る場であると共に、校内の「居場所のひとつ」としても機能し始める経過を辿るのである。このように相談室を継続利用する状況になると、相談内容に変化が生じ、面接での話題はひとつのことに限らず、日常生活で起こる様々な出来事に及ぶようになった。その中のひとつの話題として、学業に関することが語られた。

本学の相談室で2011年度から2014年度までの4年間に受けた相談内容と件数を図1に示す。

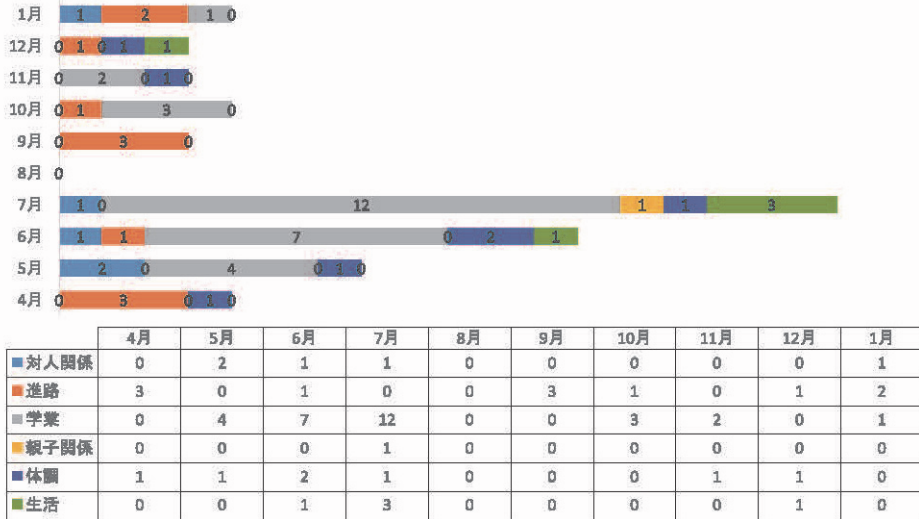
図1によると、2011年度から2014年度までの4年間で最も多い相談内容は「学業」に関するものである。しかしながら、実際の相談業務では学習面での不安や困難を来室当初から主訴に挙げる学生は少なく、対人関係や生活面、進路などに関する相談から始まり、徐々に相談内容が学業に関するものになっていく、または体調不良や親子関係の訴えが複雑に絡み合うなどの傾向があった。

次に、各年度の相談内容を図2から図5に月別件数で数値化し、学業に関する相談の特徴を考察する。

2011年度および2012年度に関しては、相談が主に4月から7月までの前期に集中する傾向があり、夏季休暇を挟み後期には相談件数が減少していった(図2・図3)。学業に関する相談件数も前期に集中しており、これは新学期を迎え、新たな環境での学習に戸惑いを感じる学生が多いためと考えられる。また、7月に学習不安を訴える学生が多くなっているが、これは前期期末試

験を迎え、単位が取得できるかどうかという不安の現れと考察できる。

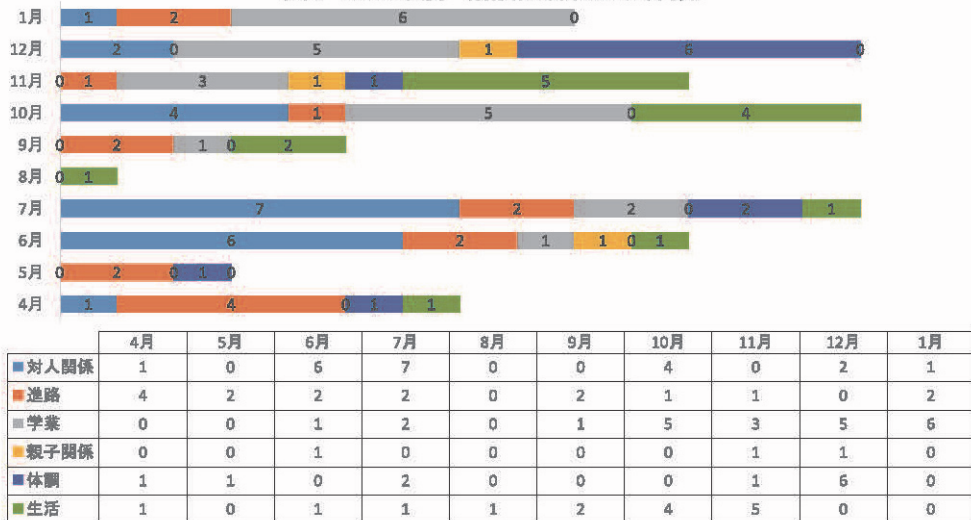
図3 2012年度 相談内容および件数



2012年度は学業に関する相談が最も多く、全体の52%を占めた(図3)。これは、発達障害の診断を受けている学生により一時的に相談が集中したことも要因の一つである。しかしながら、2011年度同様に後期を迎える頃には学業に関する相談は収束傾向にある。

この2年間の傾向を見ると、学業に関する相談は前期に集中し後期には収束する傾向にあるが、このデータと併せて注目したいのが対人関係に関する相談件数である。こちらも前期に集中す

図4 2013年度 相談内容および件数



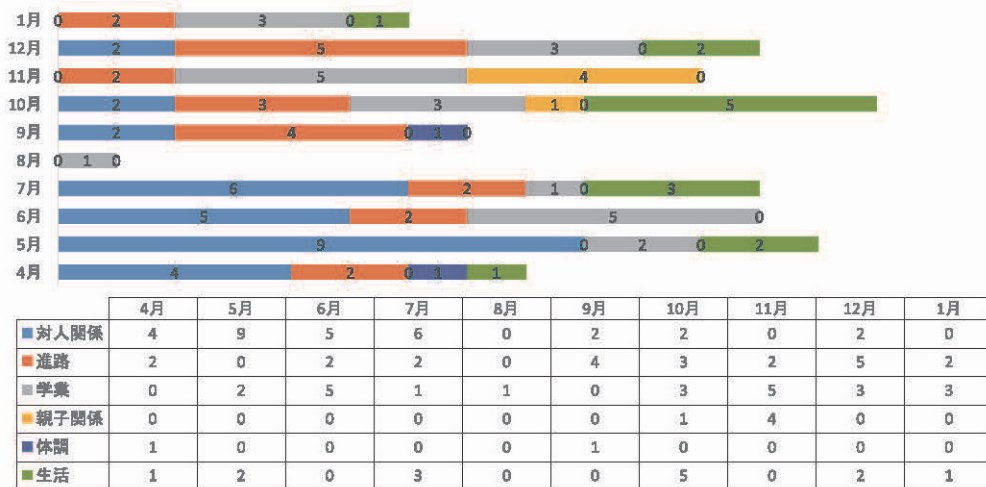
るが、夏季休暇を挟み後期には収束傾向にある（図2・図3）。学業相談と対人関係相談の収束傾向を分析すると、前期中に良好な対人関係を築きながら学業に関する悩みを打ち明けられる友だちが出来たことが両相談件数の減少に影響したと考えられる。つまり、良好な対人関係が築けていない前期にかけては学業に関して相談できる仲間がいないため、新たな環境での学習スタイルに不安を抱く学生が相談に訪れ、学業相談が集中したと考えられる。しかしながら、前期中に良好な人間関係ができて気軽に相談できる仲間が出来たことや、前期中の授業経験を臨機応変に応用し後期以降の授業に臨めるようになったことで学業相談が収束したのだろう。

その後、2013年度および2014年度に関しては、夏季休暇を挟んだ後期以降も学生の相談件数が減る傾向がなく、年間を通しての利用が見られた。特に学業に関する相談は、一定の数値を保ち、ここ2年ほどで前期よりも後期に集中している（図4・図5）。併せて、対人関係の相談件数も前期ほどではないが後期以降も一定の相談件数がある（図4・図5）。

これらの結果から、短大での新たな環境下で学生自身が良好な人間関係を構築できておらず、そのために学習環境の変化に不安を抱いても一人で問題を抱え込んでしまい、新たな学習環境へ適応するという課題を解決できずに夏期休暇を迎えてしまった可能性がある。そして後期になると授業内容はより専門的になり、前期以上に不安が集中した結果、相談室での学業相談が増加したと考えられる。

前期中に友だちとの良好な対人関係が構築できて相談できる相手がいれば、後期以降に学業相談が集中することはなかったのではなかろうか。そこで本研究では、学習不安を訴える学生がどのような相談で来室し、また相談員からどんな支援を受けたのか、相談記録を基にまとめた。そして記録内容について分析し、学習不安を訴える学生の傾向について明らかにすることを試みた。

図5 2014年度 相談内容および件数



短大生活の中で学習不安を訴える学生の傾向に関する一考察
 ―相談室業務から見てきたこと―

表1 学業に関する相談内容と支援について

	在学 年度	主訴	全 相 談 回 数	学業相談数	学業相談内容	支援内容
Aさん	2011～ 2012	学校生活	8回	(初回来室か ら2回目) 3回	①追再試の発表を受け落ち込 む。	①不安に思っていることを聞く。
					②英語のテスト勉強の方法が 分からない	②テストの出題内容を確認し、覚え やすいところを単語帳を作るこ тоなどを提案、一緒に作り使って みる。
Bさん	2011～ 2012	寮生活に ついて	11 回	(初回) 4回	①寮の規則が覚えられない。	①一度に受かろうと思わず、少しづ つ覚えていくように伝える。一人 で考え過ぎて落ち込まないよう サポートしていく。
					②英語の授業のこと。	②現時点ですべてできている事を認め、自 分に自信が持てるよう明確に話 を聞く。
Cさん	2012～ 2013	体 (過呼吸)	39 回	(初回来室か ら8回目) 7回	①授業のレポートの書き方が 分からない。	①レポートの書き方についてアド バイスをする。
					②レポートやテストが片付け てきたことで気持ちが安定 してきた。	②振り返りを一緒にに行い、昨年比 べよくできたことを確認する。
					③卒研のことで不安。	③話を聞き、自分のペースでやっ ていくよう伝える。
Dさん	2012～ 2013	対人関係	29 回	(初回来室か ら4回目) 19回	①授業や課題で周囲について いけず困っている。	①悩みについて、相談員から提案す るより、本人の中で考えが出てく るのを待ち、それを支持してい く。少し成果が出た時は、自主勉 強をしている成果であると認め、 継続してやっていく事の大切さ を伝える。
					②テストに対する不安。	②授業中の先生の話、ノート、教科 書等から自分の分かるところか ら毎日、少しずつ続けていくよう アドバイスを。先生に質問 (相談) してみるよう伝える。
Eさん	2013～ 2014	対人関係	37 回	(初回来室か ら6回目) 18回	①ピアノが上手いはず不安。 ②授業の課題が分からない。文 書を書くことが苦手。 ③実習の目的の書き方が分か らない。	①話を聞く。焦らず練習するよう伝 える。 ②友人に意見(アドバイス)をもら う。一緒にまとめていきながら、 考え方の視野を広げ文章にして いく。 ③一緒に話し合いながら考える。

(2) 学業に関する相談内容の傾向について

2011年度から2014年度までの4年間の相談記録を基に、表1を作成した。

表1では、ここ4年間で学習面での不安を訴えた継続利用の学生を対象とした。これによると、初回来室当初から学習面での困難を主訴として相談する学生は少なく、相談室利用の第一目的として学校や寮での生活、対人関係や体調に関しての相談が挙げられた。しかしながら、学生たちは相談室を継続利用する中で徐々に学業に関する困り感を相談するようになっていく。

最初は相談員に遠慮がちに分からないことを打ち上げるが、一緒に考えてアドバイスがもらえることが分かる度と何かある度に相談室で解決するというパターンが生まれ、学習に関する相談回数も増えていった(表1)。相談内容に関しても、「授業が分からない」という漠然とした訴えもあるが、そのような相談は継続していくことはなく、徐々に具体的な対処法の訴えへと変化していく傾向があった。

主な相談内容は、テスト勉強の方法やレポートの書き方、課題提出の方法などである(表1)。例えば相談員たちは、レポートの書き方が分からないという相談に関しては書き方のアドバイスを行った。また、文章を書くのが苦手な学生や実習日誌の書き方に苦慮する学生の場合は、一緒に話をしながら考え、考え方の視野を広げられるように支援した。その他、授業のことで、勉強方法やテストへの不安などが訴えられたが、これらに関しては相談員が学習不安を訴える学生に自信が持てるように話しを聞きながら、テスト勉強に付き合った。

これらの相談内容に関する相談員の支援を見ても、本来ならば学生自身が同じ講義を受講する学生同士で確認することや、教員に尋ねることですぐに解決できる問題である。継続利用者が相談室をどのような話題でも話せる場として認識し利用する中で、彼女らが学内の友人や教員との関係において、自分が困った際に頼ることのできる人間関係を自ら構築できていないことが表1の支援内容からも明らかである。このように、他者に尋ねれば解決できそうな学習に関する簡単な問題が持ち越され学習不安に繋がっていることが示された。

まとめと今後の課題

本学の学生相談室の相談業務では学業に関する相談件数が徐々に増えていることの実感を踏まえ、本研究で学習不安を訴える学生を調査し、その傾向について相談室業務から見えてきたことを分析した。

まず、2011年度から2014年度までの4年間の相談記録を基に相談内容を累計し現状の把握を試みた。その結果、この4年間で最も多い相談内容が学業に関することであり(図1)、相談業務で実感していたことが数値として明確に示された。学業相談が多いという結果は、近年の先行研究(池田2007, 高橋・田口2012)とも共通するところである。

筆者らは、以前から学生の対人関係に関する相談件数が多かったことから、当初はこの4年間の相談業務の中でも対人関係の相談が最も多いと考え、学業に関する相談は徐々に多くなり始めたという実感でしかなかった。しかしながら、4年間の相談内容を数値化した結果、学業に関する相談が累計的には最も多いという結果が示されたのである。

我々の当初の予測は覆されたわけであるが、何故このようなことになったのか図1のデータをもとに考えた。すると2011年度に関しては対人関係も学業に関する相談も共に16件であったが、その後、対人関係に関する相談は2012年度に大きく減少し、2013年度と2014年度にかけて急増していた。これに対し、学業に関する相談は緩やかな増加傾向を辿っている。加えて、両相談内容の特質を考えると、対人関係に関する相談は主訴としてあがりやすいのに対し、学業に関する相談は主訴としてあがるまでに時間がかかる。つまり、対人関係に関する相談件数の急な増加と主訴としてあがりやすい特質が筆者らの思考に影響を及ぼしたと言える。

次に、年度ごとの月別相談件数の累計を図2から図5に示したところ、学生の学業に関する相談について興味深い傾向が示された。

2011年度（図2）、2012年度（図3）においては、学業に関する相談は主に前期に集中するが、前期期末試験を終え夏期休暇以降は収束する傾向があったのだ。これは、学生自身が新たな学習環境を迎え不安を抱えたとしても、おおよそ前期中には問題を解消させ、後期には前期のことを踏まえ臨機応変に対応した結果と考えられる。また2011年度および2012年度に関しては、対人関係の問題も前期に集中するが、後期には大幅に減少している（図2・図3）。このことも踏まえると、前期中に学習不安を抱えたとしても、良好な人間関係が構築される中で、学業に関する相談仲間が学内にでき学業相談が減少したとも考えられる。

しかし、2013年度（図4）、2014年度（図5）においては、夏期休暇を挟んで以降も学業に関する相談件数は減らず、後期に集中して一定の数値を保つ結果となった。これは、新たな学習環境へ適応する課題を解決できないうちに夏期休暇を迎えてしまった学生が、後期には授業内容がより専門的になっていくことから、不安が集中した結果であると考察できる。更に、2013年度および2014年度の対人関係に関する相談件数に関しても、後期以降も一定の相談件数が見られる（図4・図5）。このことから学習不安を訴える学生は、後期以降により専門的になった学業に関して相談できる仲間関係が構築できていないため、相談室を訪れていると考えられた。

筆者らは学生相談室の相談記録を基に学習不安を訴える継続利用者を対象とし、その相談内容と支援について表1にまとめ、学生の傾向についても分析した。その結果、初回来室から学業に関する悩みを主訴にする学生は少ないが、相談員との関係が深まる中で「授業が分からない」という漠然とした悩みをきっかけに、徐々にその悩みがより具体的な内容へと変化していく傾向があった。悩みの内容は授業の課題やレポートの書き方、テスト勉強の仕方、文書の書き方などであり、主に学内での対人関係が良好であれば解決できる問題ばかりである。しかしながら、これらの学習不安を訴える学生に関しては自分が困った時に頼れる人間関係が構築できていないことが本研究の結果からも見えてきた。

以上の結果をまとめると、①本学の相談室において学習不安を訴える学生は増加傾向にあること、②それらの学生は学習面で相談相手となる良好な人間関係が構築できていない可能性が高いこと、③そのため学習に関する前期中の不安が解消されないまま後期を迎え、より専門的になった授業に不安を抱えていることが考えられる。従って、今後も学生相談室では引き続き学習不安を訴える学生に支援を行うことが求められるだろう。幸いながら、本学では学生相談

室において担当者が毎月カンファレンスを行い、加えて定期的に学内の教職員が誰でも参加できる拡大連絡会を開催している。今後はこれらの機会を更に有効に利用し、学内で相談員と教職員が互いの情報を提供し合い、学習面での支援状況を共有し合える活動を充実させていきたい。

引用・参考文献

- 橋本景子・富永礼子 (2014) . 保健室・カウンセリング室を訪れる学生の姿からその役割について考える 高田短期大学紀要32, pp7-14.
- 池田忠義・吉武清實・高野明・佐藤静香・関谷佳代 (2007) . 学生相談における学業・進路の相談内容の特徴に基づく支援のあり方 東北大学高等教育開発推進センター紀要(2) , pp143-155.
- 栗坪良樹 (2005) . 短大生の学力とは／〈ことばの力〉が自分を育てる 平成17年度私立短大就職担当者研修会. pp1-8.
- 長櫓涼子・佐藤厚・宮下加奈子・太田いく子・佐藤紗菜子 (2014) . 学生相談室「なごみ」における学生への対人関係支援の一考察－学生相談室の取組みを通した心の居場所づくりの成果－ 上田女子短期大学紀要37, pp57-66.
- 高橋洋一・田口淳 (2012) . 学生相談室の利用状況とその特徴 香川高等専門学校研究紀要3, pp41-45.